

病虫害発生概況

〔病害発生概況〕

水稲・麦

4月中・下旬の低温、6月の早ばつ、7月中～下旬に長期間の長雨と低温、日照不足、9月中～下旬の早冷と日照不足など、稲生育期間中に恵まれない気象条件が頻発した。いもち病はこのような気象条件によって全般的に多発生となり、葉いもち発生面積率50.6%、穂いもち44.3%となり、昭和1970年から1982年までの13ヵ年中的いづれも第3位にあたる多発生となった。沖縄県を除いて九州7県すべて葉いもちが多発生した。早期水稲は4月中・下旬と5月上旬に襲来した寒波によって苗が一部枯死、萎凋したところもあり、初期生育の回復のため広範に追肥が施された。6月の好天により生育は順調となったが、出穂時期の多雨、日照不足、全体的に多肥料条件であったことから葉・穂いもちともに多発生となった。宮崎、鹿児島、熊本、長崎、佐賀の各県いづれも早期水稲主要品種コシヒカリが多発生となった。宮崎は全域にわたり発生し、鹿児島は熊本地区を中心として多発生、穂いもちは過去10ヵ年の平年比ほぼ2倍の199%となった。

普通期水稲は7月中～下旬の長雨、日照不足によって耐病性が著しく低下し葉いもちが多発生した。穂いもちは地域によって異なるが、全般的に葉いもちにくらべて少ない発生となったところが多い。福岡はレイホウ、碧風の葉・穂いもちともに多発生、碧風は *Pnk* 侵害033レースによる罹病化とみることができる。佐賀はレイホウ、ヒヨクモチの多発生であったが、いづれも多窒素栽培による多発と一部有機りん剤薬剤耐性菌の出現による防除効果の低下に起因するところもみられた。また佐賀では昭和55年の多発年に比べて山間より平坦地の発生が目立ったとされている。熊本は阿蘇地域とイグサ跡田の八代地域に多発生、その他は山間山ろく地帯の発生が目立った。大分は葉いもち87.9%、穂いもち89.0%といずれも過去最高の発生面積率を記録した。7月中～下旬及び8月6半旬から9月6半旬まで低温、多雨、日照条件が続き葉・穂いもちともに多発生、県北平坦地のニシホマレが多発生、作況指数92まで低下した。育苗箱にイソプロチオラン剤、プロベナゾール剤を50%以上施用しているにもかかわらず、葉いもちが多発生、穂いもちは防除時期がやや遅れたことも原因して多発生となった。宮崎ではミナミニシキを主体とする多発生であった。以上いもち病が近年短い間隔で多発する年次が多くなり、西南暖地におけるいもち病の発生生態に変化がみられているので、十分な防除対策が必要とされている。

白葉枯病が熊本不知火町、上益城地区を中心に9月以降多発生、発生面積率18.1%は最近の発生率と比べやや多い

発生となった。また大分でも坪状発生が広域にみられ、7月の長雨と台風13号、19号による影響が大きいとみられる。紋枯病は熊本で面積率38.7%でやや多発生、鹿児島早期水稲で中央、熊本地区(面積率76.9%)を中心にやや多発生となった。

ムギ類赤かび病は福岡、宮崎、長崎でやや多発生し、大分は多発生となった。九州地域における赤かび病の発生推移をみると53、54年度作付麦の発生面積率は20～30%台であったものが、55年度作付麦では43%、56年に51%と急増し、増加の傾向がみられる、また小麦赤さび病、黒さび病の増加傾向が顕著で、福岡、鹿児島は両病とも増加し、長崎では黒さび病がやや多発生し、宮崎では8年ぶりに黒さび病の発生を確認した。鹿児島では過去10ヵ年の平年比で赤さび285、黒さび304%と急増している。鹿児島、宮崎両県とも3月9～11日と5月3～5日の黄砂の飛来と本病発生を関連づけている。大麦うどんこ病が福岡、佐賀、鹿児島で多発生し、宮崎ではやや多発生となった。大麦斑葉病が熊本で種子消毒、種子更新をしていない地区でやや多発生した。鹿児島で二条大麦ダイセンゴールドに縞萎縮病が発生し、本病が初確認された。

転作作物

大豆紫斑病が主に収穫期の雨によって紫斑粒が増加し佐賀、長崎、鹿児島で多発生し、福岡、大分、宮崎ではやや多発生となった。立枯症が福岡、佐賀で多発生し、佐賀では生育後期に立枯れ症状を呈し枯死する株が多く、原因が明らかでなく問題となっている。葉焼病が熊本、大分で多発生、鹿児島でやや多発生し、有効な薬剤がないこと抵抗性品種の検討が不十分であることから防除対策が問題となっている。べと病が佐賀、鹿児島で多発生した。さび病が福岡でアキシロメに一部激発した。モザイク病が大分で、汚斑粒が鹿児島で多発生した。大豆の集団栽培地で白絹病など土壤病害虫が増加し、拡大する傾向が宮崎でみられている。

ハトムギ葉枯病が福岡、大分で多発生し、防除対策が問題となり、有効薬剤の検索がすすめられている。サトウキビ葉焼病、葉枯病が沖縄の一部で多発生した。

野菜・畑作物

キュウリべと病が夏秋、冬春作、露地ともに多発生し(福岡、宮崎、鹿児島、沖縄)、褐斑病、斑点細菌病が大分で多発生した。菌核病は露地で鹿児島、施設で沖縄に多発生し、モザイク病が宮崎、うどんこ病が鹿児島で多発生した。

カボチャうどんこ病が佐賀、鹿児島、大分でやや多～多発生し、沖縄では一部疫病が多発生した。トマト青枯病、斑点細菌病が夏秋トマトで多発生(大分)、ナスうどんこ病が鹿児島のハウスで多発生した。

ピーマン斑点細菌病が大分で多発生し、宮崎、鹿児島では *Cercospora* 属菌による斑点性の新しい病害が発生しその対

策が問題となった。TMV・P 系統によるウイルス病が鹿児島で多発した。スイカつる枯病、スイカ疫病が長崎の露地で多発した。またメロンつる枯、つる割病が鹿児島で多発した。

イチゴうどんこ病が佐賀、鹿児島、大分でやや多～多発し、イチゴ根腐萎凋症が大分の一部で多発した。エンドウ褐紋病、褐斑病が鹿児島で多発した。オクラうどんこ病が沖縄でやや多発した。

ハクサイうどんこ病が佐賀で、白斑病が長崎、大分で、軟腐病が鹿児島、熊本でやや多発～多発した。キャベツ黒腐病が鹿児島で多発した。ダイコン軟腐病が熊本の露地でやや多発し、レタス腐敗病が佐賀でやや多発した。タマネギ萎黄病が佐賀でやや多く発生し、長崎では本病の発生をはじめて確認した。タマネギベト病が長崎で多発した。

シュンギクベト病が福岡、大分、宮崎、鹿児島で多発し、拡大増加傾向がみられている。本病は大分では1981年に初確認し、宮崎では56年12月小林市で初確認されている。ショウガモザイク病が長崎で多発し、またショウガ根茎腐敗病がやや多発した。ニガウリベト病が沖縄でやや多発し、パンアップル萎凋病が沖縄でやや多発した。

沖縄では施設のスイカ、ピーマン、キュウリ、インゲンに、露地のカボチャ、インゲン、トマトに菌核病が多発した。ベンズイミダゾール系、ジカルボキシイミド系薬剤に耐性を示す灰色かび病菌が多発し、鹿児島、宮崎ではその対策に苦慮している現状にあり、また熊本ではキュウリ、ナス、トマトでジカルボキシイミド系薬剤に耐性を示す灰色かび病菌が検出された。

ジャガイモ葉巻病及び疫病がともに佐賀で多発し、ジャガイモ青枯病が長崎でやや多発、またジャガイモ黒あざ病も長崎で局部的に多発した。

サツマイモかいよう病が鹿児島で早掘マルチに多発し、沖縄ではかいよう病類似症の発生がみられた。最近各地で問題となっている帯状粗皮症（呼称は各地で異なる）が鹿児島で早掘サツマイモに多発し、宮崎では食用サツマイモに横縞症が多発した。原因の究明とその防除対策が強く要望されている。

果樹・茶樹

カンキツ黒点病が広域に発生し、福岡、熊本、鹿児島で多発し、大分、宮崎ではやや多発した。カンキツかいよう病は鹿児島で果実に多発し、大分ではやや多発した。カンキツそうか病は熊本でやや多くみられた。熊本で早生温州の収穫期に緑かび、白かびによる腐敗果が多く発生し問題となった。

ナシ黒斑病が福岡、佐賀で多発し、大分でもやや多発した。ナシ赤星病は熊本で多発した。

ブドウつる割病が主として巨峰群品種に佐賀で多発し、ブドウ晩腐病とうどんこ病が熊本でやや多発した。ブドウさび病が大分で局部的にやや多発した。またブドウ赤うれ症が巨峰栽培地帯の30～80%の樹に発生が確認され、原因の究明と優良母樹の確保が急務とされている。

カキ炭そ病が福岡で多発し、ビワがんしゅ病が長崎で、ビワ灰斑病が鹿児島でともにやや多発した。

茶あみもち病が福岡で多発し、大分、熊本ではやや多発した。茶炭そ病が熊本、大分、鹿児島でやや多発した。茶もち病は大分、宮崎でやや多発した。鹿児島で新しい系統菌による新梢の枝枯れをおこす輪斑病が発生した。また鹿児島で細菌病である赤焼病が品種ゆたかみどりに多発し問題となった。

〔害虫発生概況〕

水稲・麦

遅れ梅雨の7月後半にセジロウンカ・トビイロウンカ及びコブノメイガなど、海外飛来害虫の多飛来があった。セジロウンカの飛来成虫は株当たり50頭以上寄生していることも珍しくはなく、各県とも飛来虫を対象に防除指導が行われた。このため7月末までには各県で注意報が発令され、コブノメイガも飛来世代から防除された。トビイロウンカは飛来量からみて、後世代による被害の多発が懸念されたが、飛来がおそかったので2世代で終り、そのうえ8月下旬～9月中旬の低温による増殖抑制、飛来後セジロウンカとの同時防除などにより、各地とも秋期の被害は軽微に終った。また、コブノメイガも同様に2世代で終り、しかも2世代目は晩生種や干ばつによる遅植田で発生したに過ぎなかった。

以上のほか、長崎県の早期稲では5月にイネヒメハモグリバエが多発し、一部では植えかえたところもあった。近年九州南部で発生しているイネアザミウマは、宮崎県では早期で並の発生、鹿児島県では7月上・中旬普通期に多発したところもあった。アワヨトウは長崎・鹿児島両県の一部で、6月下旬～7月上旬に飛来し、多発したところがあった。南部の早期稲でカメムシ類の多発が予想されたので、警報を発令して防除を徹底したことと、乳熟期が長雨で密度増加が抑制され、実害は少なかった。イネドロオイムシは九州では珍しく、1980年から福岡・大分両県境の高標高地帯に発生しており、本年は昨年発生地域を中心に拡大した。

麦類では、九州北部のトビムシ類は多目、佐賀県有明干拓地40haにヤノハモグリバエが異常多発した。二条大麦と大豆の組合せで10年以上の連作ほ場でみられており、被害率100%で、減収率は30%と推定された。

転作物

宮崎・大分両県を除き、秋大豆に10～11月ハスモンヨトウが多目であった。このように遅く発生したのは、7月の長雨で播種・生育が遅れ、10～11月が高温であったことによる。カメムシ類は全般的には並～やや少の発生であったが、播種がおくれたほ場では多目のところがあった。そのほか一部の地方でダイズサヤムシガ、ハダニ類、スリップス類、アブラムシ類が目立った。飼料作物では長崎県でア

ワヨトウが10月に発生したところがあった。

野菜・畑作物

各種野菜類で5～6月の空梅雨で、ハダニ類とアブラムシ類が多かった。ミナミキイロアザミウマは全般的には施設・露地とも、昨年比に比べ少ない目であった。これは昨年の多発により、本年はナスやウリ類の作付が減少したこと、育苗期からの防除指導の徹底、ハウス地帯ではハウスの内外の広域一斉防除などの対策が効果的であったことによる。しかし、福岡・佐賀両県では夏秋ナスに多発、沖縄では広範に多発した。局部的に多かったのはイチゴにハスモンヨトウ(10～11月)、ネギにネギコガ、キャベツとハクサイにコナガ、エンドウ(11～12月)にハモグリバエ、秋エンドウとインゲンマメにヒラズハナアザミウマなどであった。

畑作物では、春作バレイショにアブラムシ類、ニジュウヤホシテントウ、サツマイモ(5～6月)にイモキバガやサツマイモトリバが多かった。サトウキビではカンシャコバネナガメカメムシ、バッタ類(9～10月)などが、一部の地方で目立った。

果樹・茶樹

カンキツでは空梅雨のため、各地で7月上旬までハダニ類とアブラムシ類が多く、またチャノキイロアザミウマは早くから発生し多目であった。そのほか、九州各県でゴマダラカミキリ(6月)が多目、一部ではクロゴマダラヒトリ、ミカンナガタマムシが目立った。1981年沖縄に初発生したヤノネカイガラムシは、一層分布を拡大し、発生程度も多くなった。

ナシでは、早い時期からハダニ類、ワタアブラムシが多かった。ワタアブラムシは殺虫剤に対する感受性低下が問題になっている。カキでは食葉性害虫やコナカイガラムシが漸増傾向である。各地でカメムシ類が近年になく少なかった。これはヒノキの結実が多く、カメムシの他植物への移動が少なかったからである。ブドウでは、改良マンソン仕立園(特殊溝栽培)で、ブドウアブラムシが局部的に多いところがあり(福岡・佐賀)、とくに注目された。チャノキイロアザミウマは6月中旬以降目立った。クリタマバチは南部の諸県で被害が拡大している。バナナのバナナセセリは第3～4世代に多発した。

茶では、各地で多ないしはやや多かったのはチャノキイロアザミウマ、チャノミドリヒメヨコバイ、その他一部でチャノホソガ、クワシロカイガラムシ、カンザワハダニなどであった。

農林水産省は8月24日沖縄本島とその周辺諸島及び南・北両大東島のミカンコミバエの根絶を発表した。これに伴い、26日からオレンジ類の移動規制を解除した。これは大正7年沖縄群島で本虫を発見、同11年にカンキツ類の移動が禁止されてから、実に60年ぶりの解除で、沖縄県で根絶事業を始めてから5年の歳月と15億円を要した。今後はオレンジ類の生産拡大と本土への移出が増大し、沖縄農業の振興に大きく貢献するであろう。現在、あと残された宮古・八重山両群島で根絶事業が進められており、これが完成するとわが国全土から根絶される。

(九州農業試験場 環境第一部)

昭和57年水稲主要病害虫の発生状況(発生面積 ha)

病害虫名	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎※	鹿児島※	沖縄※
(病害)								
葉穂・枝梗いもち	31,622	15,908	10,000	19,045	32,475	16,626	16,985	259
紋枯	25,284	3,104	6,000	14,650	32,900	24,680	18,277	88
白稈	22,107	2,600	11,000	21,490	33,325	26,967	28,715	174
縞葉	3,220	3,182	200	10,048	5,990	7,409	1,039	102
萎縮	5,339	1,513	100	2,000	170	35	6,138	—
黄萎	1,340	極少	800	75	1,250	47	4,137	0
小粒	9,258	194	9,000	8,596	14,020	10,648	14,961	0
心枯	0	0	200	10	0	50	396	—
(虫害)								
ニカメイチュウ(第1世代)	9,356	5,626	5,000	1,340	8,090	6,472	10,602	123
〃(第2世代)	—	29	—	1,000	2,595	—	0	—
セジロウンカ	38	0	1,500	850	1,410	1,132	6,278	4
トビイロウンカ	81	0	50	—	1,480	414	0	} 4
ヒメトビウンカ	70	0	50	—	850	389	0	
ツマグロヨコバイ	54,805	20,370	22,100	34,530	25,430	29,373	23,282	87
イネツトムシ	30,395	16,024	22,100	35,620	14,525	25,847	24,487	90
コブノメイガ	19,553	1,280	6,000	7,650	4,800	25,118	18,399	21
フタオビコヤガ	53,273	40,274	18,000	27,610	24,685	29,900	32,060	214
アワゾウシ	—	272	500	3,200	—	927	2,626	0
イネゾウムシ	38,969	6,480	20,000	31,700	35,815	19,391	15,634	184
カメムシ類	—	—	100	300	1,450	416	220	0
	950	—	1,500	1,100	110	1,020	957	1
	1,430	—	4,000	4,200	4,490	1,294	3,808	—
	1,034	—	8,500	6,300	1,850	9,651	2,423	12

※早期・普通期又は1期・2期の合計